

大賞

「殻」^{から}と歩む私の人生

高松市立木太南小学校 六年

前田 彩葉

でも私は、

「面倒臭い」

「やめたい」

生き物達をながめていると、時間がたつのを忘れる。生き物なら、何分でも、何時間でも、何日でも観察していられる。一つ一つのごく僅かな動きでも、見逃せない貴重な瞬間に思える。

こんなにも私をとりこにする生き物達は、ある種の魔法使いなのではないだろうか？

私は、生き物が大好きだ。今、私の家では、犬、カメ、カタツムリ、オカヤドカリ、ヤドカリ、金魚と一緒に暮らしている。犬とオカヤドカリ以外は全て複数だ。もちろん、毎日の世話が必要になる。カタツムリの虫籠はヌ

ルヌルしていく、しつかり洗わなければいけない。水を使うことになるので、冬はとても手が冷たい。はつきり言つて、時間がかかつて大変だ。高学年になると下校時刻が遅くなり、帰宅してから寝るまでの限られた時間のほとんどを生き物達の世話に費やしている。

第9回
△子どもノンフィクション文学賞〇

「ヤドー」をながめながら考える。

私は今年の夏休みの自由研究のテーマを、「殻」と決めていた。我が家で暮らす殻を持つ生き物、カタツムリ、ヤドカリ、オカヤドカリを見ていて、殻の不思議にせまりたいと思ったからだ。重い殻をなぜ背負っているのか。中はどうなっているのか。疑問がどんどんわいてくる。そして、最大の私の疑問。この子達を治療できる人はいるのか。

ふと、ある人物のことを思い出した。ある人物とは、沖縄美ら海水族館獣医師兼総合研究センター動物研究室室長の植田啓一先生のことだ。講演会のために香川に来ていた時にお会いしたことがある。その時は時間がなく、少ししかお話しすることができなかつた。私は以前から獣医師になりたい、と思っていた。それも普通の獣医ではなく、ほ乳類も、は虫類も、両生類も、昆虫までもを診られる獣医だ。植田先生なら、私の疑問に答え、この研究を素晴らしいものにする手助けをしてくれるかもしれない！もつとお話を伺いたい！そう思った私は、沖縄

に行くことにした。勉強旅行に出発だ！自分の中のワクワクをおさえながら、飛行機の座席に腰かけた。

沖縄にはあつという間に着いた。きれいな海を見て、ヤドーも連れてきてあげたかつたな、と一番に思った。沖縄は、オカヤドカリのふるさとだ。ヤドーに、景色を思い出させてあげたかつた。

総合研究センター動物研究室では、係長の岡信一郎先生にもお話を伺うことができた。岡先生はヤシガニ博士で、沖縄海洋博公園に生息するヤシガニを研究している。ヤシガニはオカヤドカリ科で、オカヤドカリの仲間と言える。喜びいさんでお話を聞くことにした。

「魅力を感じないようになっている。」

これは、岡先生のお話の中で、一番心に残った言葉だ。魅力を感じてしまうと、事実を科学的に、そして正しく見ることができなくなるそうだ。私はいつも、一匹一匹のかわいさにのめりこんでおかしくなる。魅力を聞かれたら、山のような数を答えられる自信がある。それはいいことだと思っていたが、研究者の立場に立つた時は、

それがじやまになることがあると教えてられた。

植田先生の話の中では、

「好きなものを一つ持ち続けるのはいいことだけれど、それだけではいけない。いろいろな事を知つておかなければ、生き物の診察はできない。」

という言葉が印象に残った。私は、世の中に生き物は沢山いるのに、興味のある一部の生き物のことしか知らうとしていなかつた、ということに気が付いた。だから、これからはもっと視野を広げて、さまざまな生物の勉強をしていきたい。そして、植田先生が

「まだ聞いたことがない。」

と言つていたオカヤドカリの獣医師に私がなろうと思つた。お二人から学ばされたことはいっぱいあり、お話を伺えてよかつた。ヤシガニを触らせてもらつたり、C Tを見せてもらつたりと、貴重な体験ができた。沖縄に来て本当によかつたと思った。将来への意志が固まつた沖縄旅行だつた。

オカヤドカリ達が活動している海に行つた。透き通つ

ていて、少し緑がかつてゐる。太陽の光を反射して、水面が輝いてゐる。とても美しい海だつた。職員の人々に、砂浜にある穴の中にオカヤドカリがいるよ、と教えてもらい、死にもの狂いで、でも生体を傷付けないよう掘つた。しかし、何もいなかつた。はいざりまわつて岩の穴などもさがしたが、見つけられなかつた。

私はこの結果を、今、冷静に考えてみれば、よかつたと思う。なぜなら、私が掘つたくらいでゴロゴロ見つかるようでは、乱獲されてますます数が減つてしまふ。オカヤドカリの中には絶滅危惧種に指定されている種類もある。これ以上人間達がすみかをあらしてはならない。私の早まつた行動を少し反省した。目に前に広がる砂浜をオカヤドカリでいっぱいにして、保護したいなどいう夢を持つて香川に帰つた。

今回の研究の題名は、

「^級からと共に生きる」

だ。からを持つ生き物達といつしょに、今も、これからも生きていくからだ。

第9回
◀子供ノノイクシヨン文学賞 ◻

まずはカタツムリだ。カタツムリは、三年ほど前から

我が家で飼育し、冬眠も成功してどんどん成長している。ところがある日、私は世話の途中で床に五匹のうち一匹（名前はサブレ）を落としてしまった。おそるおそる拾い上げてみると、やはり殻の一部分が欠けていた。以前、殻が割れてしまつた子が死んでしまつたという記憶があるため、私は青ざめた。しかし、これをプラス思考にかえて、殻が修復するか実験してみた。卵のからを沢山与えて様子を見てみると、約二週間後に殻がきれいに再生していたのでほつとした。

もう一つ、女子力アップの美容効果の実験をしてみた。カタツムリの粘液を使つた化粧品が多いので、効果を知りたかった。毎日私のひざの上に三分間のせ、はだの調子を観察した。ここで気をつけることは、カタツムリをのせる前に肌を冷やすということだ。カタツムリにとつて、人間の体温はやけどするほど熱いらしい。個体に負担がかからないよう心がけた。約一週間後、私のひざは、ザラザラからつるつるに変化していた！きれいにし

てくれてありがとう！

そのほかにも、びっくりすることがあつた。なんと、あの殻の中には内臓があつたのだ！胃や心臓など、重要な臓器がきちんとあり、殻は体の一部分ということがわかつた。殻は、やはり身を守るために役立つていて、天敵に対してからをふり回して撃退する種類もいるということが面白かった。

今年の夏は、初めて繁殖に成功し、約八十個の卵が産まれた。白く輝く卵はまるで真珠のようだつた。そ一つ別の容器に移して毎日観察していると、だんだん黒くなつてきた。約一ヶ月後、小さくてかわいい赤ちゃんが誕生した。朝、産まれた赤ちゃんを見つけた時は、パジヤマのまま踊りあがつて喜んだ。産まてすぐは、一まきほどの小さな殻だが、二まき、三まきと成長していくように、これからも大切に飼育したい。

次はヤドカリ。私とヤドカリとの出会いは、ゴールデンウィークに潮干狩りに出かけた際、あまりのかわいさに連れて帰つたのがきっかけだ。私がつくつた人工海水

にもすぐに慣れてくれた。ヤドカリはその名の通り、宿を借りて生活している。インダタミやキサゴ、カニモリガイが好みのようだ。頻繁に宿替えをすることに驚いたが、生きていくために必要な行動だと知り、海まで貝殻を拾いに行つた。

宿替えの様子を観察していると、個体によつて性格の違いが見えてきた。はさみが一番大きかつた「ジャン」（オス）は、いつもいばつている。宿貝やエサを奪い取つたりしていつも強引。ジャンよりはさみが小さい「ケン」（オス）はいつもおつとりとしている。ジャンに乱暴なことをされても怒つたことがない。「一番小さい「ポン」（メス）は、好奇心旺盛で水槽の壁を登るのが好き。すばしつこく、活発だ。一匹一匹にきちんと性格があると知ることができた。

ある日、突然ポンが死んでしまつた。ポンはジャンとケンに、何度もガーディングをされ、卵を産んでいたので弱つてしまつたのだろう。ガーディングとは、正しくは産卵前ガーディングのことだ、オスがメスの宿貝をつ

かんでつれ回す行為のことだ。つれ回して交尾をし、卵を産ませる。これを二匹に交代でされるとは、相当な負担だつたにちがいない。メスがいなくなつてオスは悲しんでいるだろうか；と、水槽をのぞきこんだ私はひつくり返りそうになつた。ジャンは砂にもぐつてうなだれている。ケンはうずくまり、触角がだらりとたれさがつていた。このままでこの二匹の命も危ない！ そう思った私は、海に同種のメスを探しに行つた。

三匹連れて帰り、水槽に入れるど、ジャンがムクツと起き上がり、一匹を抱え込んだ。ケンも嬉しそうにメスの後を追いかけていた。メスの存在が大切だとわかつた。これからもオスメス仲良く、長生きしてほしいと思つてゐる。

最後のシメはオカヤドカリだ。私が飼つてゐる「ヤドー」をお迎えしたわけは、カリーチャんとの出会いがあつたからだ。

私はヤドーを家族に招き入れる前、「カリー」というオカヤドカリを飼つていた。その時は、オカヤドカリに

▷子どもノンフィクション文学賞 ◇

ついてあまり知らなかつたので、砂を一～二センチ程度しか数いていなかつた。カリーやはハセンチと大きく、もぐるのに十分な砂の量ではなかつた。しかし、私はこれで大丈夫だと思つていた。

約一ヵ月後。いつものように世話をしようとする、エサ皿をおし上げてカリーやが砂にもぐつっていた。脱皮をしようとしていたのだろう。私は遊びでもぐつているのだと思い、カリーやを持ち上げて砂を平らにもどした。その時が、生きているカリーやを触った最後になるとは夢にも思わなかつた。

数日後。ケースのフタを開けると、何ともいえない異様な臭さが鼻を包んだ。心配になり、カリーやを抱き上げると、カリーやの体が宿貝の中からズズズズ…と出てくるのだ。怖くなつてカリーやをもとの位置にもどしてあげ、フタをしめた。

翌日。臭いは強烈になつてゐる。迂闊に呼吸すると大きな事になりそうだ。ここで、やつと気がついた。カリーやは死んでしまつたのだ、と。私のせいで死んだも同然だ、

と。悲しみに浸ろうとカリーやに顔を近づける。ものすごい異臭が襲つてくる。笑い事ではないのだが、思わず苦笑してしまう。カリーやと過ごしたのは、わずか一ヵ月半ほど。砂の量の失敗さえなければ…と悔んだ。そして自分の勉強不足を実感した。

このような事があつたので、オカヤドカリを飼うのはしばらくやめておこう…。と思っていた。しかし、ヤドーと出会つてしまつたのだ。かわいい！しつかりと勉強すれば、この子を長生きさせてあげられるかもしれない！と思った私は、ヤドーを迎えることにした。こうして、ヤドーは家族の一員となつたのだ。

お迎えして約二日後。ヤドーが砂にもぐつて出てこない。さつそく脱皮かもしれない！と思い、そつと見守ることにした。それから一ヵ月たつたが、まだ出てこない。二ヵ月が過ぎた。とても心配になり、ケースをのぞきこんだ。…異臭はしない。ゴリ…。

「ん？」

ゴーリ…。また、音が聞こえた。耳をすませると、ヤドー

が砂をほつてゐるであろうガサガサという音と、足をこすり合はせているゴーリ、ゴーリという音が聞こえてきた。

「生きてる！」

と思わず叫んだ。そして、もぐつてから三ヶ月がたつたある日。私が学校から帰ると、ケースの中でモゾモゾと音がする。おそるおそるのぞいてみると、ヤドーが出てきていた！見事脱皮に成功することができた。これもカリーオのおかげだ。カリーオへの感謝の気持ちでいっぱいだ。

それからヤドーに、お祝いでポップコーンをあげた。

どういうわけか、ヤドーはポップコーンが大好きで、普

通のフードは全然食べないので、ポップコーンは五、六個食べる。ポップコーンを超える好物があるのか調べてみることにした。ポップコーンに味を似せれば食べるかと、どうもろこしを油と塩でいためた。しかし、けちらかしただけで少しも食べてくれなかつた。塩からいせん

せいは食べたが、ポップコーンほど好きではなさそうだ。いろいろとためしてみたが、ポップコーンが一位の座か

ら降りる気配はなかつた。

ヤドーの好きなものは、ポップコーンと、もう一つある。高い所に登ることだ。飼育ケースには、オカヤドカリ用ジヤングルジムを入れてあげているのだが、それでは物足りなさそうにしている。そこで、研究もかねて、どこまで登るのか調べようと思つた。八十センチのはしごを手作りし、登らせてみた。すると、みるみるうちに上がつていき、わずか三分ほどで頂上までたどりついてしまつた。

「もうないの？」

ときよろきよろしていた姿がかわいかつた。

オカヤドカリの背負つてゐる貝殻には、ちゃんと役割がある。やわらかい腹部を守るほかにも、貝の中に水をたくわえておき、非常時に備えているそうだ。オカヤドカリは賢いな、と改めて感じた。

私が沖縄で抱いた夢、

「砂浜をオカヤドカリでいつぱいにする」
を実現するために考えていることがある。それは、

第9回
△子どもノンフィクション文学賞〇

「オカヤドカリの繁殖」

だ。今までは、飼育下でのオカヤドカリの繁殖は不可能だと言っていた。が、十分可能であることが証明され、数の減少を少しでもくい止められればと思ったからである。必死にゾエア幼生を放幼する姿は、きっと感動的だろう。小さな宿貝を沢山見つけるのは大変そうだが、大きく成長したときはとてもうれしいにちがいない。かわいい仔オカヤドカリの姿が早く見たいと思つた。

前にも書いたが、今、オカヤドカリ科の中には、絶滅に向かつてゐる種類が多い。それは、人間が絶滅においてやつたものなのだから、人間の手で救うべきだと私は思う。一刻も早く救われることを願つてやまない。

私は、作品中に、「動物」という言葉は使わずに、「生き物」と置きかえるようにした。私は、「動物」という言葉があまり好きではない。なぜなら、「動く物」と言つてゐるようだからだ。大切な一つの命なのに、動く物

というたとえはおかしいと思う。私は、「命あるもの」という意味の「命有物」(めいゆうぶつ)と、改めたいと

思つてゐる。少し変かもしれないが、こうしたほうが生き物達に失礼がないと思う。

研究の文章は、ほんとパソコンで打つた。私はキーボード打ちが苦手なのだが、皆が読みやすいようにと頑張つた。寝る時間がいつもより二時間ほど遅くなつたこともあつた。カタカタ、カタカタと私の指がキーボードを叩く音が部屋の中に響いた。私の血と汗と涙と努力と苦労のつまつた作品が完成したのは、夏休みが終わる一日前のことだった。

この研究をふり返つてみて、殻を持つ生き物達や、植田先生と岡先生、そして知識を増やしてくれた本、それに苦手を得意に変えてくれたパソコンのキーボードにも感謝しなければならない。殻について沢山学び、不思議にせることができ、苦手も克服できた。素晴らしい夏休みだつたと思う。

私は、

「どうして生き物が好きなの？」

と聞かれても、答えられない。しかし、この研究を通し

て、今すぐに答えられなくてもいいんじゃないかな、と思うようになつた。生き物達には素晴らしい点が数え切れないほどある。そのこと事態を理由にすることはできない。何個かにしぼつて答えにするのも、間違っていると思う。

これから沢山の生き物と出会い、沢山の発見をするだろう。生き物達と殻への感謝の気持ちを忘れず、その答えをじっくりと探していきたい。いつか、はつきりと答えられる日がくると信じて。